ハイデガーの「陶酔」と「作品」としての有限な現存在

青松茉矢（東京大学）

本発表はハイデガーのニーチェ解釈に登場する「陶酔(Rausch)」が、美的状態の根本のみならず、有限な自己としての現存在を形作る意志の力であると主張する。

ハイデガーは 1936 年から 1940 年にかけて『ニーチェ』講義を行なった。その第一部にあたる『芸術としての力への意志』（1936～1937）は、ニーチェの美学を換骨奪胎する試みである。ハイデガー＝ニーチェによれば、「力への意志」は存在するものの全ての「生起（Ereignis）」と解釈され、産出的性質を持つ芸術こそが、存在の根本生起として理解されるべきものである。ハイデガーは本講義を通じて、芸術（作品）を、狭義には美術的なものとして、広義には世界の諸事物として捉えながら、芸術論＝存在への問いへと展開していく。

本論で注目するのは講義で登場する「陶酔（Rausch）」という概念である。ニーチェ＝ハイデガーの用いる「陶酔」とはいわゆる生理現象・酩酊状態ではなく、「美的な根本状態」且つ「力の上昇」「充溢の感情」であり、芸術が成立するために不可欠なものである。ここで持ち出される「感情(Gefühl)」は現存在の根本様態であり、すなわち陶酔は現存在の存在の根本で生じる。ニーチェが芸術＝芸術家の産出的な性質のみに注目し、創造者の美学に囚われているのに対し、ハイデガーはこの「陶酔」に主観を超えた脱自的なものを見出し、さらには創造者/受容者、主観/客観の区別を超えた感情として再構築させることでニーチェと対決した。陶酔は「あらゆる行為と観照、受け止めと呼びかけ、伝達と自己解放のあらゆる能力のあらゆる上昇の交互的浸透」である。(GA6.1|102)しかし陶酔においていかに芸術「作品」が作られるのかという議論は講義の中では曖昧なままに留まる。John Sallis は著書 *Transfigurements*(2008)において、その手がかりを『芸術作品の根源』の中に見出すが、その指摘は本講義で「作品」が、自身が創造者ではない存在者全てにまで拡張された概念であることが考慮されていない。「陶酔」は「自身を掴み出し」「自身を取り集める」意志として、現存在を有限な--『カント書』(1929)で言われるところの--「作品」として形成する故、『芸術作品の根源』における受容者と作品の関係以上に根源的な力を持つと考えられる。本論では、拡張された意味での「作品」を作る陶酔の力をあえて『カント書』の超越的構想力と共に再考するという新しい試みの下、両者の時間性、衝迫性を分析する。超越的構想力と結び付けられた美的根本状態としての陶酔は、従来の「美的経験」についての議論を存在論へと拡張する可能性を持ち、美学芸術学とハイデガー研究に新たな視点をもたらすだろう。